



日モ環境ソニン

環境分野で連携！「日モ環境シナジー」開始

日本の北海道大学と NPO 法人モンゴルエコフォーラム、モンゴル国の研究教育機関の連携による環境活動「日モ環境シナジー」が2009年11月スタートします。



北海道大学の学生によるモンゴルでの植生調査

気候変動に伴う環境変化や人間活動における環境負荷など、地球環境分野における国際協力による相乗効果（シナジー）を目指した環境活動「日モ環境シナジー」を2009年11月にスタートします。

「日モ環境シナジー」は、日本の北海道大学のグローバル COE プログラム(IFES-GCOE)が中心となり、NPO 法人モンゴルエコフォー

ラムとモンゴル国の研究教育機関の連携で行うもの。

活動内容は、本紙「日モ環境ソニン」（ソニンはモンゴル語で「新聞」の意）の発行、座談会「日モ環境オアシス」、シンポジウム等を行う「日モ環境デー」の開催です。

これらの活動を通して、両国における環境意識の向上を図っていきます。

創刊にあたって

日本の最北端の島、北海道。南北に長い日本列島の中でも、異彩な土地、風土を持っています。気候は亜寒帯、広い大地、おらかな人々。私自身、研究を通してモンゴルには幾度となく足を運んできましたが、北海道とどこか似ていると感じます。左の写真は、モンゴルでの植生調査の風景ですが、おそらく日本で「これは北海道の写真です」と言えば、多くの人が信じてしまうのではないかと思います。

「相撲」等、文化の面では既に、日蒙はお互いに近い存在と思いますが、自然の環境という点では、日本人は北海道を通してモンゴルを感じることができるかもしれません。

私たちは、自然など環境面でも、日蒙がお互いを近く感じることができるようになればと考えています。

本紙はその第一歩です。環境の知識の交流を生み、お互いから学ぶ多くのことを基に、最終的にモンゴルと日本が環境活動のパートナーとなればと思っています。



編集長 宮崎 真
(IFES-GCOE)

HEADLINE

- ・特集 モンゴルと北海道。人と自然の共通点・相違点

モンゴルと北海道の、人と自然の共通点と相違点はどこにあるのでしょうか？

- ・「日モ環境シナジー」のご紹介

地球環境変化への対応！モンゴルと日本の国際協力による相乗効果をめざして

- ・北海道大学 IFES-GCOE プログラムのご紹介

北海道大学におけるグローバル COE プログラムを通じた教育研究拠点形成の取り組み紹介です

- ・今後のスケジュール

「日モ環境シナジー」の今後の活動予定についてご紹介します。



特集 モンゴルと北海道。自然と人の共通点・相違点

創刊号である本号では、日本の中でも「北海道」に焦点をあてます。モンゴルと北海道の自然と人の共通点はどこか？違いはどこにあるのか？まずは、知識の交流からはじめましょう。

ーモンゴルと北海道の地勢ー

北海道とモンゴルの位置関係や土地利用等をご紹介します。両国の位置関係は図1のようになっています。それぞれの中心都市である、モンゴルのウランバートルと北海道の札幌の距離は約2,700kmあります。北海道は北緯41度～45度の範囲に位置し、モンゴルは、北緯41度～52度と南端はほぼ同緯度ながら、ウランバートル等都市部はより高緯度に位置しています。

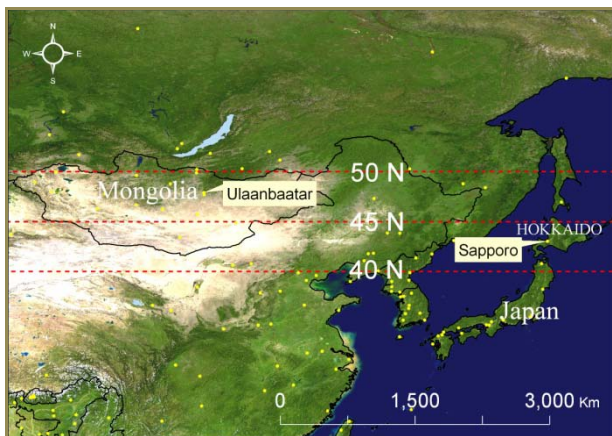


図1 モンゴルと北海道の位置関係

標高については図2のように、北海道の方が標高は低く札幌は約25mで、ウランバートルは約1300mですから、札幌はウランバートルよりかなり標高が低いです。

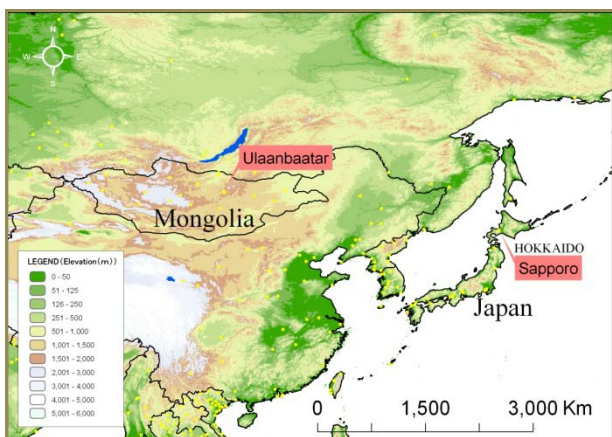


図2 モンゴルと北海道の標高

植生については図3のように、北海道の森林面積は71%であるのに対して、モンゴルの森林面積は6.5%となってい

ます。森林面積の差は写真1でも見られるように、北海道では森林が密であるのに対して、モンゴルでは森林がまばらです。

また、耕作地については、北海道は約118万ha（日本全体の約4分の1）で、モンゴルは100万haですから、ほぼ同じ面積です。しかし、北海道では、毎年、作物を作ることができますが、モンゴルでは、土地の養分が十分でないために、毎年、農作物を植えることはできずに、1年ごとに休ませています。



図3 モンゴルと北海道の森林率



写真1 北海道（左）とモンゴル（右）の森林

また、北海道は海に囲まれているので、海の魚や貝などを獲る水産業も盛んですが、モンゴルは内陸国で海に面していませんし、川魚もほとんどの川で捕獲が禁じられているので、獲っていません。

ー北海道とモンゴルの気候ー

北海道の札幌の年平均気温は約8.7℃、年降水量は1128mmと、モンゴルのウランバートルの年平均気温は約0.1℃、年降水量は193mmですから、ウランバートルの方



が、かなり気温が低く、降水量も6分の1程度です。さらに、図4にある通り、月毎の変化を見て頂くと、札幌では冬季にも多くの降水が雪として降りますが、ウランバートルで夏季に降水が集中しています。

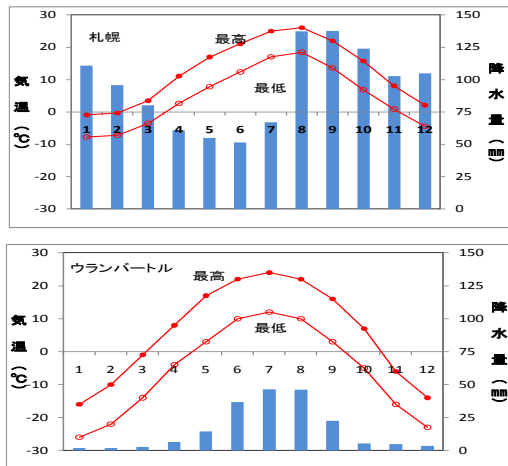


図4 札幌のウランバートル気候の比較 (上: 札幌、下: ウランバートル)

-北海道とモンゴルの人-

図5のように、北海道の面積は約8万km² (日本の総面積の約22%)、人口は554万人 (日本の総人口の約4%)、人口密度は72人/km² (日本全体の人口密度の約5分の1)です。モンゴルの人口は約270万人で北海道の半分、面積は約156万km²で北海道の約20倍、人口密度は1.6人/km²で北海道の約40分の1です。このようにモンゴルと北海道では、面積もそこに生活する人々の数もかなり異なっています。

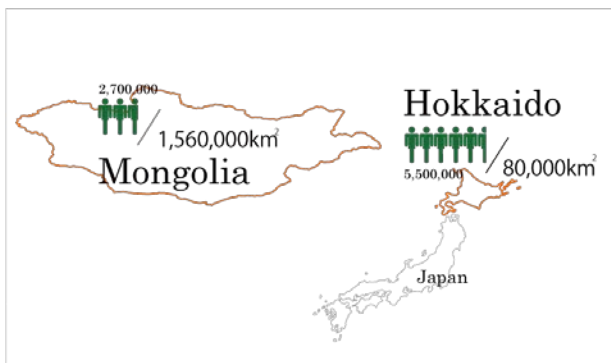


図5 北海道とモンゴルの人口密度

しかし、モンゴル人にも日本人にも幼少期に蒙古斑と呼ばれる先天的に発生する青い母斑が皮膚上に出る事から、民族的にはつながっていると考えられます。また、言語においてもモンゴル語と日本語は語順が似ており、単語を学べば、あとはそのまま並べるだけで話す事 (発音は随分と違うので難しい) ができます。さらに、文化の点においても、モンゴルにも日本にも相撲 (ただし、モンゴル相撲では日本のような土俵はない。写真2)があります。また、モンゴルと日本の民謡の間でもなんとなく聞き覚えのあるような気がします。皆さんもご存じの通り、最近ではモンゴル人の力士が日本の相撲界で、横綱・大関を始め多数の幕

内力士として活躍しています。その点でも、モンゴルと日本との間の文化的交流はかなり密であるといえると思います。



写真2 日本とモンゴルの相撲の風景 (左: 日本の大相撲、右: モンゴルのナーダム)

食生活については、北海道とモンゴルではだいぶ異なります。北海道では、ジンギスカン (写真3) という料理で日本の中でも羊肉を多く食べる地域です。ジンギスカンは北海道特有の料理として、日本の他の地域の人にも知られています。モンゴルでは、肉といえば羊が多く、海はもちろん川の魚もほとんど食べません。羊を多く食べるという点では、北海道はモンゴルと近い文化を持っていますが、海産物や他の肉も多く食べるという点では大きく異なります。

ところで、その羊の食べ方ですが、北海道のジンギスカンは、鉄板の上で子羊の肉を焼いて食べます。モンゴルでは、水を入れる容器に、肉や岩塩、そして熱した石を入れて蒸し焼きにします。

また、モンゴルでは基本的に子羊ではなく成熟した羊を食べます。野菜についても北海道では、じゃがいもとニンジン、玉ネギ、キャベツ、トウモロコシに加えてホウレンソウやキュウリなどの青い野菜も多く食べますが、モンゴルでは野菜が少ない為にじゃがいもとニンジン、玉ネギ、キャベツを主に食べます。

似ている点と少しずつ異なる点が、食文化にはありました。もちろん環境面でも、そのような点があると思います。しかし、まだしっかりと整理できていません。これからの交流を通して、お互いに学んでいければと思います。



写真3 モンゴルと北海道の羊の焼肉の風景 (左: モンゴルのホルホク(羊肉の蒸し焼き) (右: 北海道の羊の焼き肉(ジンギスカン))

日モ環境シナジーのご紹介

「日モ環境シナジー」のシナジーとは相乗効果のことです。文化的に近いモンゴルと日本の橋渡しを、北海道からも行っていこうと思っています。特に北海道はモンゴルと自然など環境の面においてお互い学ぶことがあると思っています。お互いの学びが相乗効果となり、最終的に日本とモンゴルの環境変化への対応や人間活動における環境負荷軽減につなげていければと思っています。



さて、そんな相乗効果を生み出していくために私たちが最初に行うことは、環境の「知識と人」の交流です。「日モ環境シナジー」では、次の3つのことを行っていきます。

1. 日モ環境オアシス(座談会)の実施(年4回程度)

日モの研究者が講演者となり、関連の研究者の得意分野を出し合い、日モ環境シナジーに向けた、最新の知見を提供します。

独立行政法人国際協力機構(JICA)のモンゴル・日本人材開発センターの市民講座の一環として、政策決定者や市民の皆様を対象としたものです。

講演者と参加者の活発な意見交換による情報交換を大事に開催します。是非ご参加ください。

実は11月14日(土)に第1回を開催する予定でしたがインフルエンザの影響で延期することになっています。また予定が決まり次第、お知らせします!

2. 日モ環境ソニン(ソニンはモンゴル語で新聞)の発行

日モ環境オアシスの内容を中心に、専門家以外にも分かりやすくお伝えする新聞で、本誌がその創刊号です。

日本語版とモンゴル語版を作成し両国の方に日本とモンゴルの環境について知識の交流を図っていきたくと考えています。印刷物として配布するだけでなく、IFES-GCOEのホームページを通じて広く普及していきます。

3. 日モ環境デーの実施

2010年夏に日本とモンゴルの環境研究機関に属する研究者が、政策決定者ならびに市民向けに講演会等を行うシンポジウムの開催を予定しています。

また、IFES-GCOEでは2010年夏に、観測技術等を学ぶ海外フィールド観測サマースクールをモンゴルで開催する予定です。

この二つを合せて「日モ環境デー」とし研究者と政策決定者、市民の皆様との交流を図っていきます。

北海道大学 IFES-GCOE のプログラムの紹介

様々な環境問題に対応するためには、社会的要請を踏まえた、特定の学問分野にこだわらない実践的な研究が必要です。北海道大学では2008年より、日本の文部科学省のグローバルCOEプログラムとして、「統合フィールド環境科学の教育研究拠点形成」(IFES-GCOE)を開始しました。私たちは、地球環境問題を解決するための地球システム科学の世界的な拠点の一つとして、「統合フィールド環境科学」の教育研究拠点を目指します。そして、研究はもとより、行政や企業、教育などの現場で活躍できる環境リーダーを育てていきたいと考えています。IFES-GCOEでは、4つの目標(100年観測網の構築、統合モデルによる将来予測、国際的に活躍できる研究者の育成、実践的フィールドの提供)を設定し、人材育成と研究活動を推進していきます。私たちは、海外観測留学生推進室・国際プロジェクト推進室・環境教育研究交流推進室の3つの推進室と統合モデリングタスクフォースを通じて、次のような教育や研究を行っています。なかでも、海外観測留学生推進室では、環境

劣化に対し脆弱な地域に100年観測網を設置することを目標としています。シベリア、モンゴル、インドネシアに海外フィールド観測拠点を設置し、それぞれの地域に固有かつ重要なプロセスを解明するため、観測研究を推進しています。また、それらの拠点で、海外フィールド観測サマースクール等の研究教育活動を展開しています(図6)。



図6 世界に広がる観測網

今後のスケジュール

2010年3月 日モ環境ソニン第2号発行

2010年7月 日モ環境デー開催

- ・海外フィールド観測サマースクール
- ・市民向けに講演会・シンポジウム等

*今回延期になりました日モ環境オアシス等の情報については、詳細が決まり次第、下記のホームページに掲載します。

website: <http://www.ees.hokudai.ac.jp/gcoe/>

本紙の編集・出版

北海道大学大学院環境科学院

グローバルCOEプロジェクト支援ユニット

〒060-0810 北海道札幌市北区北十条西5丁目

E-Mail: gcoe@ees.hokudai.ac.jp

Tel: 011-706-4861,4862

Fax: 011-706-4867

website: <http://www.ees.hokudai.ac.jp/gcoe/>